

晴れた日には出かけよう！
～まちのミリョクを再発見!!～

10 日の出町の

まつりばやし



誰もが心に記憶する「祭り囃子」の音色とリズム。今回は日の出町の祭囃子に迫ります。

日の出町の祭り囃子は江戸祭囃子の流れを汲む団体によって保存・伝承されています。「重松流」7団体と「神田囃子」1団体、「目黒流」1団体の3流派、9団体があり、どの流派も大太鼓1、小太鼓2、横笛1、鉦1の5人での演奏が基本になります。

平井には、重松流が4団体、目黒流が1団体の計5団体があります。重松流の志茂町囃子保存会と加美町祭囃子振興会、目黒流のさくらぎ囃子保存会は宮本にある春日神社に、重松流の八幡囃子保存会と三和囃子は道場にある八幡神社に主に奉納しています。大久野には、重松流が3団体、神田囃子が1団体の計4団体があります。重松流の幸神囃子保存会は幸神の幸神神社、新井囃子連は新井の白山神社、報徳囃子連は肝要の一ノ護王神社、そして神田囃子の長井水口囃子保存会は長井の八坂神社に主に奉納しています。

平成10年(1998)に『重松流祭り囃子』と『長井神田囃子』が日の出町無形民俗文化財に指定されました。重松流祭り囃子は、平井の志茂町囃子保存会と加美町祭囃子振興会、八幡囃子保存会、大久野の幸神囃子保存会の4団体、長井神田囃子は、長井水口囃子保存会がそれぞれ保持団体に指定されています。

ここで西多摩全域でのお囃子の分布について見てみると、瑞穂から平井川流域、五日市の伊奈では「重松流」が、青梅から奥多摩と五日市から檜原の山間部には「神田囃子」が多く分布しているようです。

テンポの良さと小太鼓同士の掛け合いが特色の重松流祭囃子は、所沢出身の古谷重松(天保元年(1830)生)により考案されました。重松は明治5～15年(1872～82)頃、家業の藍染の行商をしながら、自分が考案したお囃子を各地に伝え歩いたといわれています。そのため、彼が行商をした道すがらにあった土地を中心に重松流が伝承されています。特に、重松が行商の際に宿を取っていた平井では熱心に指導が行われ、平井の囃子連には重松が考案した全曲が伝授されたといわれています。



お囃子の踊りを教わる子供たち

長井神田囃子は、重松流よりもテンポがゆっくりとしています。明治30年頃より黒沢村(現青梅市)の若林仙十郎(本名:仙太郎。慶応2年(1866)生)によって長井に伝授されたものといわれています。

各団体はそれぞれ神社への奉納のほか、郷土芸能保存会を通じて相互の交流を図り、郷土芸能の活性化、継承者の育成などに努めています。また、「ひので夏まつり」や、保存会が主催で行っている「郷土芸能まつり」など、様々なイベントで積極的にその技を披露し、郷土芸能の



ひので夏祭り

振興に励んでいます。

ひので夏まつりは、例年、7月下旬頃に平井中学校のグラウンドで開催されます。郷土芸能保存会を通じて出演した各団体の軽妙なお囃子が会場内に響きます。ぜひ皆さんの五感でご堪能ください。

..... アクセス



日の出WALK(観光マップ)【K-7】

